

# 大学運動部活動における補欠リーグの必要性について

## —東都大学野球三部リーグについて—

生涯スポーツゼミナール 1315019 栗原 将

### 1. 研究動機・研究目的

現在の東都大学野球連盟は春と秋に行われるメインリーグのみの開催となっている。所属大学は6大学であり、381名の部員が在籍している。しかし、4年間で公式戦に出場できる部員は一握りである。練習試合や公式戦のメンバーに入りチームに貢献したいと考えている人も多くいる中で自らがチームに貢献するのを諦めかけている部員がいるのも事実である。後者では、チームへ貢献したいとあまり考えない人でも自身の満足感のためにプレーをしたいという意味で二次リーグ（控え選手など普段試合出場の機会に恵まれない選手たちの活躍の場となる大会）への参加を希望する部員も存在する。

また、新たに判明したことで16年間二部三部の入替が起きていないことを考慮して三部リーグ自体の実力の底上げを期待しての二次リーグの立ち上げをするような声もある。総じて、野球選手は多く存在するもののプレイヤーというのは極端に少ないのが現状である。

本研究では、東都大学野球連盟3部リーグの活性化を目指すとともに補欠選手の現状を把握かつ状況の改善につなげることを目的にする。

### 2. 研究方法

本調査は、東都大学野球連盟3部リーグ加盟校の部員を対象として2018年10月15日～20日の5日間の期間でグーグルフォームを使用してアンケート調査を行った。東都大学野球連盟3部リーグ所属のチームの主務にアンケートURLの配布をお願いした。

### 3. 大学野球フレッシュマン大会

東京六大学野球連盟では新入生入学直後の春のリーグ戦前に1,2年生の公式戦の出場機会を増やすことを目的として当該学年限定のリーグ戦を行っている。神奈川野球連盟でも同じ目的で教育リーグと呼ばれる大会を開催している。主な成果として、春に開催をしている東京六大学野球連盟では、入学した新入生ばかりが神宮球場で試合を行い、今後4年間のモチベーションを作ることにもできているし、2年生は下級生に負けまいとチームに様々な相乗効果をもたらし、どの大学においても良い起爆剤となっている。また、高校時代に名を馳せた選手が多いのでレベルの高いものになっているようだ。神奈川野球連盟の教育リーグでは、東京六大学野球連盟と同様に1,2年生を中心に夏季に大会が開催されている。1年生は金属バットから木製バットに慣れ始めている時期の開催になり、今後のトップチームの戦力を測る機会としてどの大学もリーグに臨んでいるようだ。

### 4. 主な結果と考察

まず、試合の出場頻度であるが、156人中練習試合にも公式戦にもスターティングメンバーに名を連ねる選手が31人(19.9%)、オープン戦や公式戦のメンバーには入るが毎試合出場機会があるわけではない選手が52人(33.3%)、オープン戦のメンバーには入ったこと

はあるが、公式戦のメンバーに入ったことのない選手が 51 名 (32.7%)、オープン戦・公式戦のメンバーのどちらにも入ったことのない選手が 22 人であった。

様々な想いを抱く選手はいたが、総じて上級生から下級生まで二次リーグの開催を希望する選手が多くいた。自分が続けている部活動に対して公式戦に出場する機会が少ないという不満を持っている人が多いが、首脳陣に対しての不満や部内の人間関係など競技以外の部分にモチベーションを削がれている選手もいた。しかし、入部してからモチベーションが変化していると回答した選手は多くなかった。

二次リーグに参加したいと答えた人に理由を聞いたところ、「試合回数が増えるから」、「選手のモチベーション維持のため」、「メインリーグの一回勝負よりも実力を発揮しやすい」、「メインリーグ以外にも連盟として公式戦を行いたいから」、「オープン戦とは異なった雰囲気や経験が積める」、「高校野球のような一発勝負の試合もしたいから」、「明確な目標となりモチベーションに繋がるから」、「全員に試合出場ができるから」、「新人選手の成長の場として適切だし、控え選手にチャンスが与えられるだけでなく、スタメンに危機感を与え、チーム力の向上に繋がるから」、「試合に出て活躍することが野球をやっている目的だから」、「練習を実戦の場で発揮してプレーできる喜びを全員が知るべき」、「試合をすることが学生野球の意味ではなく、大学を背負って勝利を目指すことが大切だから」という回答が得られた。

純粋に試合の機会を増やすのではなく、公式戦に出てこそ意味があると回答した選手も少なくなかった。一方で純粋に自分の競技が楽しいと感じている人も存在し、とにかく試合が出来ればよいと感じる人がいたのも事実である。以上のような結果から普段試合への出場が少なくなってしまう下級生や公式戦のメンバー選出の経験をしたことのない上級生など出場に対してのルールを設けるなどしてすべてのプレイヤーが試合に出場できる場を創出することが必要ではないかと考える。

## 5. 結論

二次リーグに関しては様々な考え方や意見が出てくることが予想されるが、開催することで補欠選手の活躍の場が創出され、3 部リーグ全体の実力の底上げの効果が期待されるために開催されるべきものである。また、自チームや個人のことだけではなく、リーグ全体に意識を置いて活動を行っている選手が多くいたことも新たに分かった。各所属大学において、大きく部員の事情が変わってくるのが、3 部リーグにおいての特徴であるので二次リーグ開催においては、目的やルールなどの徹底・明文化を行うのが開催においてやらないことである。ほとんどの所属部員は野球がうまくなりたくて大学まで野球を続けている事実があるので運営陣はその場を創出して 3 部リーグの底力を引き上げる土台作りをすることが任務である。

## 6. 卒業論文の執筆を終えて

本研究を進めるにあたり、多くの方のご協力を賜りました。この場をお借りして感謝申し上げます。中々順調には進まなかった卒論ではありますが、指導教諭の黒須先生は見放さずに最後まで温かくご指導くださいました。そのおかげもあり、苦勞して完璧では無いながらもなんとか卒論を書き上げることが出来ました。ありがとうございました。